

論文要旨

【目的】産褥早期の疲労感の経日的変化を示し、妊娠経過や妊娠中の生活状況および分娩経過、産後の育児や授乳が、産褥早期の褥婦の疲労感に与える影響を明らかにする。

【方法】関東圏内の医療施設 5 施設において、経膈分娩後の褥婦 106 名を対象に自己記入式質問紙法を用いて疲労感の調査を行った。分析は、有効回答が得られた 95 名(89.6%)のデータを用いて、基本統計量を算出し、測定用具として使用した疲労感 VAS と自覚症しらべの得点の分析を行った。分析には、t 検定、反復測定分散分析、Mann-Whitney 検定、Kruskal Wallis 検定を用いた。なお、本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を受けた(承認番号：14-036)。

【結果】産褥早期の疲労感は、産褥 1 日目から 5 日目にかけて産褥日数を追うごとに有意に軽減していた($p=.041$)。また、自覚症しらべにおいては産褥 1 日目から 5 日目にかけてⅡ群(不安定感)、Ⅲ群(不快感)、Ⅴ群(ぼやけ感)の 3 群と、Ⅰ群(ねむけ感)、Ⅳ群(だるさ感)の 2 群との間に合計得点の 2 層化がみられ、Ⅰ群とⅣ群が高かった。

産科歴別にみた場合、初産婦は経産婦よりも有意に疲労感が強かった($p=.004$)。初産婦、経産婦はともに産褥 1 日目の疲労感が最も強く、産褥日数を追うごとに疲労感はある程度軽減していた($p=.046$)。自覚症しらべにおいては、初産婦は経産婦に比べてⅣ群(だるさ感)の合計得点がある程度高かった($p=.040$)。分娩施設別にみた場合、診療所/助産所で出産した初産婦は、病院で出産した初産婦よりも疲労感が強かった。特に、自覚症しらべにおいてはⅡ群(不安定感)の合計得点がある程度高かった($p=.031$)。経産婦は、Ⅰ群(ねむけ感)の合計得点がある程度減少していた($p=.017$)。出産年齢別にみた場合、初産婦、経産婦ともに、35 歳未満の女性のほうが 35 歳以上の女性よりも疲労感が強く推移していた。特に、自覚症しらべにおいて、経産婦では、Ⅰ群(ねむけ感)の合計得点がある程度減少していた($p=.019$)。また、産褥 1 日目から 5 日目の各時期の褥婦の疲労感に影響していると考えられる要因は、妊娠合併症の有無、妊娠中の運動習慣、陣痛促進剤の使用、分娩時の努責の有無、会陰裂傷度の程度、膣壁裂傷の有無、会陰縫合の有無であった。

【結論】産褥早期の疲労感はある程度に減少傾向で推移していたが、疲労感の中でも「ねむけ」と「だるさ」は、産褥 1 日目から 5 日目のいずれの時期においても大きな割合を占めていることが明らかとなり、それらの疲労感に対するケアの必要性が改めて示唆された。